

琴の音

樋口一葉

青空文庫

(上)

空に月日のかはる光りなく、春さく花の、どけきは浮世万人おなじかるべきを、梢のあらし此^(この)処^(こゝ)にばかり騒ぐか、あはれ罪なき身ひとつを枝葉ちりちりの不運に、むごや十四年が春秋を雨にうたれ風にふかれ、わづかに残る玉の緒の我れとくやしき境界にたゞよふ子あり。

母は此子^(この)が四つの歳、みづから家を出で、我れ一人苦をのがれんともあらねど、かたむきゆく家運のかへし難きを知る実家の親々が、斯^(か)く甲斐^(かひ)性^(しやう)なき男に一生をまかせて、涙のうちに送らせん事いとほし、乳房の別れの愁^(こゝろ)らしとても、子は只^(ただ)一人なるぞかしと、分別らしき異見を女^(をな)子^(こ)ごころの浅ましき耳にさゝやかれて、良^(を)人^(と)には心の残るべきやうもあらざりしかど、我が子の可愛きに引かれては、此子の親なる人をかゝる中に捨て、我が立さらん後はと、流^(さす)石^(が)に血をはく思ひもありしが、親々の意見は漸^(やうや)く義理の様^(やう)にからまりて、弱き心のをしきらんに難く、霜ばしら今たふれぬべきを知りつゝ、家も此子も、此子の親をも捨て、出でぬ。

父は一人ゆきたることもあり、此子を抱きて行きたることもあり、これを突きつけて戻りたることもあり、我れは此まゝ朽はてぬとも、せめては此子を世に出したきに、いかにもして今一たび戻りくれよ、長くとには非ず今五年がほど、これに物ごゝろのつきぬべきまでと、頼みつつかしつ歎げきけるが、さりととも子故に闇なるは母親の常ぞ、やがては恋しさに堪えがたく、我れと佯して帰りぬべきものをと覚束なきを頼みて、十五日は如何に、二十日は如何に、今日こそは明日こそはと待つ日空しく過ぎて、はては尋ね行きたりとして、面を合はする事もなく、乳母にや出けん、人の妻にや成りけん、百年の契りは誠に空しくなりぬ。

斯くて半年を経たりし後は、父もむかしの父に非ずなりぬ、見かぎりて出にし妻を、あはれ賢こしと世の人ほめものにして、打すてられし親子の身に哀れをかくる人は少なかりき、夫れも道理、胸にたゝまるもやゝの雲の、しばし晴るゝはこれぞとばかり、飲むほどに酔ふほどに、人の本性はいよいよ暗くなりて、つのりゆく我意の何処にか容れらるべき、其年の師走には親子が身二つを包むものも無く、ましてや雨露をしのがん軒もなく成りぬ、されども父の有けるほどは、頼む大樹のかげと仰ぎて、よしや木ちんの宿に蒲団はうすくとも、温かき情の身にしみし事もありしを、夫すら十歳と指をるほども

なく、一とせ何やらの祝ひに或る富豪ものもちの、かゞみを抜いていぎと並べし振舞ふるまひの酒を、
 うまし天の美祿、これを榊(しを)りに我れも極楽へと心にや定めけん、飢へたる腹にしたゝかも
 のして、帰るや御濠の松の下かけ、世にあさましき終りを為しける後は、来よかし此処へ、
 我れ拾ひあげて人にせんと招くもなければ、我れから願ひて人に成らん望みもなく、はじ
 めは浮世に父母ある人うらやましく、我れも一人は母ありけり、今は何処(いづこ)に如何なる
 ことをしてと、そゞろに恋しきこともありしが、父が終りの悲しきを見るにも、我が渡辺
 の家の末をおもふにも、母が処業しわざは悪魔に似たりとさへ恨まれける。

父は無きか、母は如何にと問はるゝ毎(ごと)に、袖のぬれしは昔しなりけり、浮世に情なく人
 の心に誠なきものと思ひさだめてよりは、生なまなか中あはれをかくる人も、我れを嘲けるやう
 に覚えて面(つら)にくし、いでや、つらからば一筋につらかれ、とてもかくても憂(うきみ)身のはて
 はとねぢけゆく心に、神も仏も敵とおもへば、恨みは誰れに訴へん、漸(やうやう)々尋常ならぬ
 道なみに尋常ならぬ思ひを馳せけり。

おどろに乱れし髪かみのひまより、人を射るやうなる眼まなこのきらきらと光るほかは、垢あかにまみ
 れし面(おも)かげの、何処(いづこ)にはいかならん好き処(よ)ありとも、凡たゞ人(ひと)の目に好しと見ゆべき
 かは、恐ろしく気味悪く油断ならぬ小僧と指さゝるゝはては、警察にさへ睨まれて、此処

の祭礼かしこの縁日、人山きづくが中に忌はしき疑うたがひを受けつ、口をしや剪兎すりよ盗人と万人にわめかれし事もありき。

人の眼はくもりたるものにて、耳は千里の外までも聞くか、あやまり伝へたる事は再度きえず、渡辺の金吾は誠の盗賊ものに成りぬ、やがては明治の何と肩がきのつくべきほど、おそろしがらるゝ身かへりて恐ろしく、此処を離れて知らぬ土地に走らんと思ひたる事もあり、恨みに堪えかねては死なばやと思ひたる事もあり、幾度水のおもてに臨みて、これを限りと眺めたる事もありしが、易きに似て難きものは死なりけり。

捨てはてし身にも猶衣食なほのわづらひあれば、昼はそと 処となくさまよひて何となく使はれ、夜は一処不住の宿りに、かくても夢は結びつゝ、日一日とたゞよひにたゞよひて、過しゆくほどに、脊たけと共にのびゆくは、ねじけたる心なるべし。

(下)

御行おぎやうの松まきに吹かぜ音さびて、根岸田たんぼ甫おくてに晩稻かりほす頃、あのあたりに森江しづと呼ぶ女あるじの家を、うさんらしき乞食小僧の目にかけてつゝ、怪しげなる素振そぶりあ

るよし、婢(はしため)女ども気味わるがりて唄(うた)き合(あ)ひしが、門の扉(あけ)の明(あ)くれに用心するまでもなく、垣(し)に枝だれし柿の実ひとつ、事もなくして一月あまりも過ぎぬるに、何時(いつ)となく忘れて噂(うわさ)も出(なり)ず成(あるじ)しが、主(あるじ)の女(さと)が敏(さと)き耳には、少しあやしと聞かるゝ事あり、秋雨しとくと降りて物あはれなる夜、ともし火のもとに独り手馴れの琴を友として、あはれに淋しき調べを弄(もてあそ)びつゝ、上野の森に聞えいづる鐘の、さりとはいはれぬるかなと、さしおきて聞けば、軒(たひ)ばを伝ふ雨しだりのほかに、梢をゆるする秋風の外に、物のけはいの聞ゆる様なること度(たび)かさなりぬ。

軒(たひ)ばに高き一もと松、誰れに操(ひとりずみ)の独(ひとり)栖(す)ぞと問はゞ、斯道(これ)にと答へんつま琴の優しき音色に一身を投げ入れて、思(おも)ひをひそめしは幾とせか取る年は十九、姿は風にもたへぬ柳の糸の、細々と弱げなれども、爪箱とりて居(ま)りなまを改たむる時は、塵(ちり)のうきよ(みだれ)の紛(ま)雑(ざつ)も何ぞ、松風かよふ糸の上には、山姫きたりて手やそふらん、夢(うつつ)も現(ま)も此うちにとほ々笑みて、雨にも風にも、はたゞめく雷電にも、悠然として余念なし。

頃は神無月はつ霜この頃ぞ降りて、紅葉の上に照る月の、誰(と)が砥(と)にかけて磨(みが)きいだしけん、老女が化(けはひ)粧(ま)のたとへは凄し、天下一面くもりなき影の、照らすらん大(たい)廈(いか)も高樓(わらわ)も、破屋(わらわ)の板間の犬の臥(ふしど)床(ど)も、さては埋(う)もれ水人(みづ)に捨てられて、蘆(あし)のかれ葉に霜の

み冴ゆる古宅の池も、^(かけひ)笕のおとなひ心細き山した庵も、^(いほ)田のもの案山子も小溝の流れも、
須磨も明石も松島も、ひとつ光りのうちに包みて、清きは清きにしたがひ、濁れるは濁れ
るまに〜、八面玲瓏一点無私のおもかげに添ひて、^(すみ)澄のぼる琴のね何処までゆくらん、
うつくしく面白く、清く尊く、さながら天上の楽にも似たりけり。

お静が琴のねは此月此日うき世に一人生みぬ、春秋十四年雨つゆに打たれて、ねぢけ
ゆく心は巖のやうにかたく、射る矢も此^(こゝ)処にたちがたき身の、^(はて)果は臭^(しうがい)骸を野山にさ
らして、父が末路の哀れやまなぶらん、さらずば悪名を路傍につたへて、腰に鎖のあさま
しき世や送るらん、さても心の奥にひそまりし優しさは、三更月下の琴声に和して、こぼ
れ^(そ)初めぬる涙、露の玉か、玉ならば趙氏が城のいくつにも替へがたし、恋か情か、其人の
姿をも知らざりき、わづかに洩れ出る柴がきごしの声に、うれしといふ事も覚えぬ、恥か
しさも知りぬ、かねては悪魔と恨らみたる母の懐かしさゝへ身にしみて、金吾は今さら此
世のすて難きを知りぬ、月はいよく冴ゆる夜の垣の菊の香たもとに満ちて、吹^ふくや夜あ
らし心の雲を払らへば、又かきたつる琴のねの、あはれ百年の友とや成るらん、百年の悶
へをや残すらん、金吾はこれより百花爛の世にいでぬ

青空文庫情報

底本：「新日本古典文学大系 明治編 24 樋口一葉集」岩波書店

2001（平成13）年10月15日第1刷発行

初出：「文學界 第十二號」文學界雜誌社

1893（明治26）年12月30日

※括弧付きのルビは校注者が加えたものです。

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2007年8月9日作成

2013年10月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

琴の音

樋口一葉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>